

「底が突き抜けた」時代の歩き方 262

ネット恋愛が成立する条件－映画『ユー・ガット・メール』

映画『リリイ・シュシュのすべて』は、虐待する少年と虐待される少年がネット上のハンドルネームで、リリイ・シュシュというカリスマ歌姫のネット・ファンサイトを通じて濃密に交流し合うが、虐待する少年のほうから青リンゴを目印にリリーのコンサート会場で会おうと提案したことから、自分の交信相手が虐待する少年であることを知った虐待される少年は、現実だけでなくバーチャルな世界まで自分の居場所を失っていく絶望と憎悪に駆られて、虐待する少年を刺殺するというストーリーである。もちろん、双方の少年がお互いに誰であるかを知らないまま、現実に出会う欲求など持たずに交信のみを続けていたなら、酸鼻な現実にもかろうじて耐えられ、悲劇が起こることもなかったにちがいない。

ところが、岩井俊二監督はネット上での交流が濃密になっていけばいくほど、ネット上での癒しを現実の中でも求めていく欲求に駆られずにいられなくなる人間の常を見越した上で、現実が悲惨であるのにバーチャルな次元での癒しが入手される筈がありえないという、ネットの虚構性を真正面から見事なほど描いてみせた。現実での悲劇はネットの世界をも覆い尽くさずにはいられなくなる、という当然の摂理が映画のなかで呈示されていたのだ。しかしながら人間は、現実の中での生き難さをどこかで正直に吐き出す場所を持たなくては現実の苛酷さに耐えられない存在であり、自分の本当の気持ちを受けとめてもらえる相手を切望する存在である。見知らぬ相手に瞬時につながっていくネットの世界ほど、現実の中で得られない関係が手軽に得られそうに思われる交信性もない。

だが、ネット交信が現実になんとかでも接触したとき、さまざまなトラブルや悲劇が生じてくるとして、いくつかの条件に恵まれさえすれば、ネット交信が現実の中での濃密な関係に発展していくこともありえないわけではない。なにしろ身体的な接触がないまま、いや身体的な接触がないからこそ、つまり、遠くの見知らぬ相手だからこそ、自分の本心をさらけ出すことができるという警戒心の解除が手伝って、自分のありのままの気持ちをストレートに相手に伝えるのであるから、心のみでの交流のありかたとしては快適である。問題は、心のみでの交流がお互いの身体にまで拡大するとき、心の交流が身体的交流に上手に接続できるなら、そこに現実的な関係が育まれるにちがいない。仕事上で敵同士であることを知らず、電子メールで交流を続けていた男女が運命的な恋に落ちていく姿を描いた映画『ユー・ガット・メール』は、ネット交信が現実での破局をもたらさずに、逆に現実の関係へと上手に着地していくラブ・ストーリーである。ストーリーはこうである。

ニューヨークの街角で小さな絵本の店を経営するキャスリーン（メグ・ライアン）には、同棲中の恋人がいるが、彼の留守中はインターネットで知り合った相手とのメール交信に胸をときめかせている。互いに相手のことはネット上のネームしか知らないが、メールを打つとき、キャスリーンは不思議なほど素直になれた。近くに大手書店チェーンが進出することになり、キャスリーンの店は危機に陥る。チェーン店のオーナーの息子ジョー（トム・ハンクス）と彼女は反目し合うが、ジョーこそがそのメールの相手だった。二人は仕事上のライバルとは全く気が付かないまま、互いにメールで励まし合う。

ここまでは映画『リリイ〜』とストーリーの構図は似ており、虐待する少年と虐待される少年の痛みを深める関係は、映画『ユー・ガット・メール』におけるキャスリーンとジョーの仕事上で反目し合う関係に相当する。メールを交信し合う二人の少年のうち一方が相手が誰かを知ることになると、キャスリーンと喫茶店で待ち合わせるようになったジョーが、メール相手がキャスリーンと知ることになるのも同じ図式である。だが、この先が違った。映画『リリイ〜』では関係は破局に向かったが、ジョーはメール相手がキャスリーンであることがわかって、逆に彼女を意識し好意を持ち始めるからである。一見高慢で鼻持ちならない女に感じられたキャスリーンが、メール上で素直に自分の気持ちを吐露する繊細な女性であることが、ジョーにわかってきたからだ。メール交信がよい作用をもたらすが、逆にメール相手が自分の気に入らない女性であることを知って、メール交信を中絶し、お互いに嫌な相手のまま推移していくことも考えられる。

どうしてジョーは自分の見知っている嫌な女のイメージでネット上のキャスリーンを打ち消さずに、その反対にネット上のキャスリーンのイメージで現実の嫌な女のイメージを打ち消していくことになったのか。それは、この映画の節目節目で二人の会話に出てくるジェーン・オースティンの小説『高慢と偏見』に、その秘密が隠されている。いくら商売敵であろうとも、お互いに本屋を経営する者同士で話が通じるのは、唯一『高慢と偏見』についてであったからだ。この『高慢と偏見』についての二人の会話を抜きにしては、二人のつながりはありえないという点で、この映画は現代版『高慢と偏見』であると解される。

小説『高慢と偏見』については、東大教授の岩井克人が経済学者らしく、朝日新聞（01．2．3）で《資本主義において何が倫理的であるかについてもっとも深く語った文学》として読み込んでいる。彼の読みによると、《父親の一存で結婚が決められた時代が終わり、若い娘がまさに商品として結婚市場にくり出してきた時代が始ま》るなかで、娘たちの願望は一樣に、《「売れなければならない」こと。すなわち男に求婚されなければならない、しかもできるだけ大きな財産をもつ男に求婚されなければならないということ》に向かっていく。ところが、家柄も財産もない代わりに、《誰にも負けない才気煥発さといつも笑っている茶色の目をも》つ女主人公エリザベス・ベネットは、小説に登場する他の娘たちが《決してしないことを、二度》する。《男からの結婚の申し出を拒否するのです。「売れなければならない」自分を「売らない」。それは、自分からは求

婚できない娘たちに与えられた唯一の権利なのです。

エリザベスが最初に拒否するのはコリンズ牧師の申し出です。俗物中の俗物でありながら、大きな財産があるわけでもないコリンズ牧師——彼の求婚を断るのは当然の決断です。彼との結婚は、売れ残りにならないための代償としてはあまりにも大きすぎます。

それに対して、ミスター・ダーシーは、古い家柄と大きな財産と優れた容姿をもつまさに最高の結婚相手です。ところが、そのダーシーからの求婚もエリザベスは断ってしまう。その理由として彼女の「偏見」があり、《彼女はダーシーの人格を誤解しているのです（誤解は後に晴れます）。だが、彼の求婚を決然と退けた理由はそれだけでは》ない。

《エリザベスがダーシーの求婚を断るのは、より根源的には、彼の「高慢」にあります。ダーシーが自分が最高の買い手であることに微塵の疑いも抱いていないからです。「売れなければならない」娘ならば誰でも狂喜して自分を「売る」だろう。彼がそう決めてかかっているがゆえに、彼女は自分を「売る」ことを拒否するのです。

もちろん、すべての読者が望む通り、エリザベスには奇蹟が訪れます。

エリザベスに拒否されたダーシーに大きな変化が訪れるからです。自分を最高の買い手と見なさない娘がこの世にいる。何たる驚きでしょうか。そしてその驚きは自己認識に変わります。

自分が拒否されたのは、まさに自分が自分を最高の買い手であると思っていたからだということがつくからです。「売れなければならない」という論理を超越してしまう娘が存在するとは思わなかった。「売ればよいというものではない」という倫理をもつ娘が存在するとは思わなかった。「売れなければならない」という論理を超越する倫理的存在として、女というものの、そして究極的には自分自身すら見ていなかったことに気がつくのです。

それに気がついたときダーシーはすでに以前のダーシーではありません。彼はより深くエリザベスを愛することができるようになったのです。そして長い「逡巡」の後、再び結婚の申し出をします。その申し出が受け入れられたことはいまでもありません。》

『高慢と偏見』をこのように読み解いてきた岩井氏は、『高慢と偏見』の中に登場する娘たちとはまさしく、「『売れなければならない』という論理によってすべてが支配されている」現代の資本主義社会に生きているいまの我々にほかならず、「二世紀も前に書かれたこの小説は、まさに徹頭徹尾「女性向け」の小説であったことによって、すべてが「売れなければならない」という論理に対し、「売ればよいというものではない」というそれを超越する倫理の存在を示すことができた（…）面白く、楽しく、そして「偉大」な現代社会の倫理の書である」と評価する。ここで『高慢と偏見』が端々に登場する映画『ユー・ガット・メール』を一味違ったラブ・ストーリーにしているのは、主人公の男女が『高慢と偏見』のエリザベスとダーシーの関係を、そのまま引き継いで登場しているからである。

大手書店チェーンの進出によって廃業寸前にまで追い込まれている小さな本屋を経営するキャスリーンは、どんな本でも「売ればよいというものではない」という倫理を生きている。この倫理は「読まれればよいというものではない」という本に対する倫理とも結びついている。一方、大手書店チェーンのオーナーの息子ジョーは当然、「売れなければならない」―「読まれなければならない」という論理に立って、ますますチェーン店を拡大し、昔からの街の文化として親しまれてきている、小じんまりとした書店を次々に廃業に追い込んでいる。小説のエリザベスがダーシーの人格を誤解する「偏見」にとらわれていたように、映画のキャスリーンも自分たちの良心的な零細書店を押し潰そうとする大型書店の冷酷な仕打ちに重ねて、ジョーの人格を誤解する「偏見」にとらわれている。そして自分の求婚を断るような娘はどこにもいるまいという「高慢」をダーシーが抱いていたように、ジョーもまた、「売れなければならない」努力をしていないような商売は、本屋といえども、淘汰されても仕方があるまいという「高慢」を抱いている。

小説ではエリザベスに拒絶されたダーシーが、自分が拒絶されたことの意味を考えつづけることによって、「売れなければならない」という資本主義の論理を超越する倫理をもつ娘に自分が初めて出会っていることに気づき、彼女の倫理を彼は受け入れていくことになった。では映画では、「売れなければならない」という資本主義の論理を前面に押し立てて、大型書店チェーンを展開するジョーは、「売ればよいというものではない」という倫理観を持った、地元の小型書店を経営するキャスリーンと、現実に対立しながらもどのように出会い、彼女の倫理に気づき、それを受け入れることになるのか。小説ではエリザベスとダーシーは直接対面する機会を通じて、「売れなければならない」という資本主義の論理は、「売ればよいというものではない」という資本主義の倫理に突き当たり、論理は倫理を認めるに至るが、資本主義の論理と倫理が対立状態にある映画では、その状態を抉じ開けていく契機はその状態からは得られない。つまり、「売れなければならない」という論理のなかで生きているジョーと、「売ればよいというものではない」という倫理のなかで生きているキャスリーンとが、対立状態のなかから抜け出して自由に本心をさらけ出すことのできる場所をもたなければ、映画のキャスリーンとジョーの関係は、小説のエリザベスとダーシーの関係になることはできない。

そこに登場するのがメール交信である。メールでは相手を知らないまま、自分の本心をさらけ出すことが出来るという最大の利点がある。大型書店の進出に脅かされているキャスリーンは、「売ればよいというものではない」という自分の倫理的立場をメールで表明し、「売れなければならない」という論理に対抗しようとする。その最大の理解者として登場するのがジョーなのである。キャスリーンがメール相手とは知らないジョーは、彼女が対抗している相手が自分であるとは当然わからないまま、メール上での彼女の主張に共感を示し、断固闘うことを勧める。その状態で推移するなら、映画は進展しない。メール交信は必ず現実交信を欲求するという鉄則にしたがって、キャスリーン

とジョーが現実に出会う一歩へと進むことによって、映画は小説へとより近づいていく。

しかしただ出会うだけでは、映画は小説に近づかない。お互いのメール相手が仇敵であることがわかったとき、メール交信も断絶してしまう^{おそれ}虞が大であるからだ。メール交信が実するためには、ジョーのほうでメール相手がキャスリーンであることを彼女に知られずに密かに知っておかなくてはならなかった。なぜなら、エリザベスに拒否されたダーシーが拒否されたことの意味に気づく必要があったように、ジョーもまたキャスリーンが闘おうとしている相手がメール上で支援している自分であることを知って、自分の現実的立場とメール的立場との矛盾に気づく必要があったからだ。だから、キャスリーンがメール相手のジョーを先に知るという逆であってもいけなかった。「売れなければならない」という論理が、「売ればよいというものではない」という倫理に出会わなければならないからだった。エリザベスに拒否されたことの意味に気づいたダーシーがもはや以前のダーシーではなかったように、メール相手がキャスリーンであることを知ったジョーはもはや以前のジョーではなかった。ジョーの経営する大型書店が「売れなければならない」という資本主義の論理のなかに「売ればよいというものではない」という倫理をかかえこんでいるのを見出したとき、キャスリーンとジョーはエリザベスとダーシーと同じく結ばれるのである。

この映画はもう一つの主題を呈示しているように思われる。それは、「売れなければならない」という論理が小説『高慢と偏見』が書かれた二世紀前と較べて、はるかに社会の隅々にまで浸透しているなかで、「売ればよいというものではない」という倫理がかろうじて余地を持ちえているのは、ネットの世界であることが示唆されているようにみえる。つまり、「売れなければならない」という論理に対抗する倫理は、もはや社会のどこにも余地を持つことができなくなったということである。映画はネット恋愛が成立する様を描写していたが、そのことは裏を返すと、ネット交信がなければ恋愛そのものが成り立たないということだ。もちろん、この映画での恋愛は「売れなければならない」という論理と、「売ればよいというものではない」という倫理の結合にほかならない。更にこの映画は、メール交信が現実交信に着地するためには、相手を知らないままの交流の仕方と、相手を知った上での交流の仕方との次元の落差に気づく必要があり、その落差を無視してそのまま移行するなら、必ず失敗するという教訓も織り込んでいる。その落差を潜るには内省が不可欠であり、その内省がメール交信の心だけの関係を現実交信の心身を伴う関係へと変化させていくのである。要するに、メール交信から現実交信へと還ってくるためには、人は内省を通じて大きく変わっていなければならないということだ。変わらなければ、メールと現実の落差のなかですべての関係がつぶれてしまうことを、この映画は小説『高慢と偏見』をなぞりながら教えてくれている。

2001年12月9日記

(追記) 正月のNHKで『高慢と偏見』が放映されるらしいです。